「社会人リフレッシュ教育特別コース」の発足

静岡大学大学院情報学研究科¹

著者抄録：静岡大学大学院情報学研究科では、今年度より「社会人リフレッシュ教育特別コース（修士課程）」を発足させた。情報化社会の進展に伴い会社や学校などの職場では、経営活動や教育活動と情報技術とを的確に結び付けることのできる知見・能力を有する人材（“情報化推進コーディネータ”と呼ぶ）が、求められている。本コースはそのような人材の育成を目的とするものであり、社会人を在職のまま受け入れ、働きながら学ぶことができる授業カリキュラムを提供するとともに、研究では職業上の問題意識に基づく実践的なテーマを重視している。そして、学習と研究の成果がそれぞれの職場に積極的にフィードバックされることを目指している。

キーワード：社会人教育、IT、経営の情報化、教育の情報化、情報化コーディネータ

Start of Special Education Course for Adult Students: Graduate School of Informatics, Shizuoka University

Graduate School of Informatics, Shizuoka University¹

Author Abstract: Graduate School of Informatics, Shizuoka University set up the Special Education Course for Adult Students in April of 2004. With the recent rapid progress in our “information society”, working places of companies or schools have increasingly needed human resources who have IT management know-how, in addition to IT knowledge and proficiency. We call such human resources “coordinators for promoting information society”. The Course aims at fostering such human resources and accepts members of the community as they are, providing curricula which allow them to learn and study while working. It also emphasizes practical themes for research, dealing with professional matters or problems students are encountering. The Course ultimately aims at learning and research results providing valuable feedback to students’ workplaces.

Key words: Education Course for Adult Students, IT, IT-based management, IT-based education, coordinators for promoting information society

原稿受理（2004-12-14）

（情報管理 47（11）：746-750）

1. はじめに

情報技術は今や、あらゆる分野において必要不可欠なものとなっている。しかし、企業や学校現場の中核的な実務担当者や管理者の多くは、情報技術や情報システムに関する体系的な教育を受けておらず、断片的な知識を自己流に習得しているのがほとんどである。また、情報系の学部卒業者であっても、情報技術の進歩の速さに対して必ずしもキャッチアップできている状況にはない。

近年、経済の情報化が進展し、企業では、経営

の問題として情報技術を取り込むことが、経営の成果に直結する環境となってきた。そして、企業経営と情報技術とを結び付けることのできる高度な知見を有する人材（これを情報化推進コーディネータと呼ぶことにする）に対する必要性がクローズアップされている。しかし、各企業が独自に人材を育成することは困難であり、地域によっては自治体等の支援が行われているものの、大学の参加が強く望まれる状況にある。

また、学校現場においても、情報教育が重視されているが、これを高いレベルで推進する人材の

¹ 静岡大学（浜松キャンパス）大学院情報学研究科（修士課程）（〒432-8011 浜松市城北3丁目5-1）Tel.053-478-1500
E-Mail：minami-t@ia.inf.shizuoka.ac.jp（研究科長 南 利明）

¹ Graduate School of Informatics, Shizuoka University (5-1 Johoku, 3-chome, Hamamatsu-shi, Shizuoka, 432-8011)

養成は十分ではない。また、学校の管理・運営のための情報インフラの整備も進められており、それを企画し運営する人材の充実も求められている。すなわち、学校現場においても、教育の情報化を推進する「情報化推進コーディネータ」が必要であり、教育委員会をはじめ初等・中等教育に携わっている教育現場からも、このような人材育成に対する大学の参加が期待されている。

このような背景をふまえて、静岡大学大学院情報学研究科では、情報技術・情報社会の最新動向を系統的に学び直すことで職業人としての資質能力の一段の高度化を期することを目的に、社会人リフレッシュ教育特別コース（定員5名）を設置した。そして、2004年4月に第1期生学生5名を受け入れた。

2. 教育のコンセプト

本情報学研究科ではこれまでも社会人特別選抜入試を行ってきた。それは、社会で職業などを経験した人材が、大学院に入学し一般の学生と同様の大学院生生活を送ることを前提としている。よって、入試は社会人向けであっても、入学後は一般学生と同じカリキュラムで学ぶこととなっている。しかしながら、このような体制では、企業や学校現場で必要とされている情報化推進コーディネータを十分に育成することはできない。

そこで、これまでの体制とは違った社会人リフレッシュ教育特別コースを開設した。このコースは、在職のまま職業人を受け入れ、「働きながら学ぶ」、「職業上の問題意識を研究テーマとする」、「大学院での学習・研究成果を職業の場にフィードバックする」ことをねらいとしている。

本コースの概要を図に示す（図1）。企業や学校といった職場のニーズに対する本コースの人材育成と人材の資質向上が示されているが、学習研究過程においては、絶えず、企業や学校とのインタラクション、研究成果のフィードバックと問題の提供を重要視している。

また、職場のニーズは、時代・社会情勢・国際情勢によっても変化がもたらされるので、新たに生ずる問題やニーズに対して循環的に対応することを、教育の基本コンセプトとしている。

3. 授業・研究指導体制の特徴

本コースを開設するに当たり、情報化推進コーディネータを育成するためにどのような授業科目が必要か、また、実際に職場で働きながら学ぶ環境をどのように確保するか、などに腐心した。本節では、授業・研究指導体制の特徴とそれにかかわるカリキュラム上の工夫を述べる。

まず第1に、授業、本コースのカリキュラムでは、大学院設置基準第14条特例を適用し、個々に勉強

図1 社会人リフレッシュ教育特別コースの概要

条件が異なる社会人が適切な教育を受けられるよう、各人の都合に合わせた柔軟な授業開講や演習、そして研究の指導ができるように配慮しており、休日の開講や集中講義、およびインターネットを利用した研究指導などを行うことにした。

第2に、夜間・休日開講や集中講義に伴う事務連絡体制や学生指導体制等については可能なかぎりインターネットを利用して行うこととした。

第3に、従来のカリキュラムよりも必修科目を大幅に減らし選択必修科目を増加させることによって、さまざまな業種の社会人リフレッシュ教育のバリエーションを可能としている。

第4に、社会人学生を対象にした実学的な科目を選択必修科目として6科目（組織情報化設計論、情報システム設計論、実践マネジメント特論、eマーケティング特論、情報教育カリキュラム設計論、情報科教育法特論）を新設した。これらは社会人として働いた経験・知識を前提として展開され、実際にかかわっている（またはかかわっていた）実務に対応させた形で、現実の問題をどのように解決・改善すればよいのかを考察するような演習を取り入れた授業構成となっている。また、大学において情報の専門教育を修得していない社会人に対しては、情報科学の基礎・基本を短期間で修得するための接続科目を、選択科目として準備した。

第5に、在学期間2年間のうち後半の1年間は職場で修学できる制度とした。ここでは、社会人学生の職場でのニーズに基づく現実的なテーマを、指

導教員と密接な連携の下に設定する。

第6に、最新のネットワーク技術の教育とともに、社会の情報化において課題である情報セキュリティについては、一般コースでのこれら授業の受講を可能とすることにした。

以上が、授業・研究指導体制の特徴とそれにかかわるカリキュラム上の工夫である。次に4節と5節で、具体的な授業内容を詳しく見ていく。

4. 授業内容

本コースの学生は、選択必修科目、選択科目（接続科目）の中から、授業を履修する。以下にその内容を示すことにするが、選択必修科目が本コースの大きな特徴となっている。

(1) 選択必修科目

社会人として働いた経験・知識を前提として展開される授業科目であり、大学での学問を理解するだけではなく、実際に現在かかわっている実務に対応させた形で問題解決に生かせる能力の育成を目指して、現実の問題をどのように改善すればよいのかをみずから考察するような授業内容としている。それら授業6科目の概要を下表（表1）に示す。なお、これらの授業は一般学生も受講可能としている。

(2) 選択科目（接続科目）

情報系の大学教育を修得せずに社会人として情報システム系の職種に就いている者を対象に、情報科学の基礎・基本を短期間で修得するために設

表1 選択必修科目の授業概要

授業科目名	授 業 概 要
組織情報化設計論	5. 授業事例 5.1. に授業内容を記述
情報システム設計論	5. 授業事例 5.2. に授業内容を記述
情報教育カリキュラム設計論	情報リテラシー、情報を駆使した問題解決力、論理的・体系的な思考などの能力の育成は、学校現場に限らず、企業内や生涯学習の場でも必要である。このような能力を育成するための教育におけるカリキュラム設計について、その原理と事例を学ぶ
情報科教育法特論	高等学校での教科「情報」の必修化、小中学校での情報教育の普及などに応じて、これを指導する教員の指導法の一段の向上が求められている。情報教育を行なう際の、授業モデルや授業のノウハウについて学ぶ
実践マネジメント特論	情報社会における望ましい社会システムや経営システムについて、これをどのように計画・構築・改善していけばよいかの合理的な方法論を、実企業の事例を取り上げながら学ぶ
e マーケティング特論	情報社会におけるマーケティングについて、ブランド確立や市場開拓などにおける情報戦略論、顧客価値創造におけるマーケティング手法などについて、実企業の事例を取り上げながら学ぶ

置しており、情報数学特論、ネットワーク特論、プログラミング特論などの授業科目からなる。

ほかに、一般コース科目として30あまりの授業があり、社会人学生は自由に受講が可能である。

知的インタフェース論などの情報科学系の授業と、情報倫理形成論、メディア法学などの情報社会学系の授業があるのが、文工融合を基本理念とする当情報学研究科の特徴である。

5. 授業事例

5.1. 組織情報化設計論

本授業は、企業や学校などの組織経営における課題を情報化の視点から解明し解決するための方法論を学習することを目的とする。

具体的には、以下の授業内容からなり、討議や演習を取り入れて受講生の実務に役立つ実践的な内容としている。

(1) 情報化方法論概説

情報システムの2, 3の事例研究を基に情報化の成功／失敗要因について討議し、仕事の仕組みの解明と再設計（すなわち業務分析・再設計）こそ最も重要な成功要因であることを理解する。

(2) 業務分析基礎演習

仕事の仕組みを“業務フロー”として記述する手法を例題演習により行ったうえで、受講者自身の関与する業務についての業務フローを作成し、グループ討議によって課題整理を行う。

(3) 業務設計基礎演習

例題による新業務設計演習をグループに分かれて行い、発表し討議する。なお、本授業での討議はKJ法に類した方法を多用する。

(4) 事例研究

文献を与え自宅で学習したうえで「ITは経営を変えるか？」について討議して、組織経営と情報化の要諦について理解を深める。

(5) 業務設計応用演習

受講者が先に作成した業務フローについて、業務改革・改善課題の抽出と業務再設計とを試みる。

2004年度は、社会人学生5名（教育関係4名、企業関係1名）、一般学生2名の受講者であり、社会人学生の日程都合を配慮して、夏休みを利用しての前半2日、後半2日の集中授業とした。討議や演習を多く取り入れたことにより、大変に活気のある授業となり、学生の満足度も高く、本授業の目的は達成されたと言える。

討議風景

5.2. 情報システム設計論

社会人学生が所属する業種における情報システムを例に取り上げ、これらの情報システムの設計・開発・運用までの流れを実務分析的に学ぶことを目標とし、情報システムの分析・設計・運用の理論と実社会での現実の対応付けを図る。

内容は以下の3部構成から成り、2004年度は、前半2日間で(1)と(2)の集中授業を、また後半2日間で(3)の授業を、上記の「組織情報化設計論」の授業に続いて夏休み期間に行った。

(1) 概念的背景概説

システムおよび情報の本質を理解し、よいシステムが具備すべき要件を明らかにする。また、システムを構築するためのいろいろなアプローチについて、その違いを比較する。

(2) 構造化方法論

ニーズ分析と要求定義、システム構造の理解と図式表現、情報の流れの分析、蓄積情報の分析などの方法について、演習を交えて理解を深める。

(3) オブジェクト指向方法論を学ぶ

オブジェクト指向の概念を理解し、UML記法を用いてユースケース分析、シナリオ分析、オブジェクト分析などの方法について、演習を交えて学習し、理解を深める。

2004年度の受講学生は、5名の社会人であり、共通の実務的事例を取り上げることに難しさがあった。そのため、身近で理解しやすい図書館システム、レストランシステム、インターネット書籍販売システムの3つの事例についての講義と演習を行った。学生の学習意欲も高く、大変充実した授業であった。

6. 受講生（小学校司書担当教諭）手記

情報学は現代社会のさまざまな分野に影響を及ぼしている。公共図書館の書架を見渡すと、情報とは無関係の分野を探すほうが難しく、私の勤務する教育現場もその例外ではない。

本コースを選択した動機は、自分で学ぶことに限界を感じたからである。情報分野の内容の多くは、基本を学ぶ機会がないため、私の中では保留状態になっていた。この部分を理解しなければ次へ進めない状況にあることはわかっているものの、教育現場の変化は著しく、2年間職場を離れることに危機感を感じていた。そこで、本コース受講という選択肢を知り、受講した。そして現在、保留状態は徐々に解消されつつあると感じている。

本コースでは、働きながら学びたいという社会人に向けて、日程や時間はもとよりカリキュラムまで便宜が図られている。

特に、選択必修科目は、情報学を基礎から学び直したいという社会人に対応した内容であり、難しくもあったが充実した時間であった。

例えば、実際に企業へ見学に行ったり、企業の第一線で活躍している方が講師であったり、学びが社会と直結していたことは、改めて社会の仕組みや問題点を考えるよい機会となった。また、少人数での演習中心の学びにより、難しい内容が咀嚼（そしゃく）されて自分のものになったと感じている。

職場を離れられない社会人学生、さらには離れたくない学生のためにも、大学院での新たな学びの提案と内容の更なる充実を期待している。

7. 将来の展開

本コースは、今年度に定員どおりの5名の社会人学生でスタートしたばかりである。種々の課題はあるが、幸い、初年度5名の社会人学生は、意欲と資質が大変に高く、授業への協力はもちろん、課題に関する意見交換にも積極的である。

本コースの最大の特徴は、企業や学校といった職場におけるニーズや社会人学生自身の問題意識などに基づく学習・研究活動と、本コースの提供する講義や個別指導とが絶えず連携し双方向的にコミュニケーションをとる構成になっていることであり、職場と大学が相互の長所を生かし、不足する点を相補う形で連携していくことにある。

今後も、静岡大学大学院情報学研究科がある浜松地域を中心に、産業界や教育界、そして行政機関（例えば博物館や市役所など）などからの、社会人学生の参加を期待しており、産業の活性化、教育の深化・高度化、そしてさらに地域の活性化に最大限の貢献をしたいと考えている。

職場のニーズは、時代・社会情勢・国際情勢によっても変化がもたらされる。新たに生ずる問題やニーズに対して、職場と協調しながら対応し、また新たな問題提起を行うという、循環的な関係を保持し続けることが、本コースの生命線であると認識している。さらに広い分野からのいろいろな課題や価値観を持った社会人学生を受け入れ、より実践的で多様な教育研究を展開し、真に求められる能力を持った「情報化推進コーディネータ」の育成に努めるとともに、社会に対して、研究成果のフィードバックや問題提供を行っていきたい。